

復興支援活動・収支報告  
参加学生による感想文

# 復興支援活動・収支報告

## 復興支援活動 収支出一覧

<収入（募金）>

661,182

■年度別

年度	期間	金額
2011年度	2011年6月9日～2012年3月31日	599,400
2012年度	2012年4月1日～2013年3月31日	61,782
2013年度	2013年4月1日～2014年3月31日	0
		661,182

■項目別

収入項目	内容	金額
常設募金箱による募金		152,237
個人名義募金	10名	130,911
団体名義募金	4団体	180,466
学内イベント等での募金	保護者会、愛祭、チャリティコンサート等	197,568
		661,182

<支出>

586,724

■年度別

年度	期間	金額
2011年度	2011年6月9日～2012年3月31日	249,710
2012年度	2012年4月1日～2013年3月31日	192,371
2013年度	2013年4月1日～2014年3月31日	144,643
		計 586,724

■項目別

支出項目	内容	金額
学園祭	活動報告用備品、材料費等	5,423
スタディツアー活動	交通費補助、活動備品等	107,951
チャリティコンサート	コンサート企画準備費等	4,118
ボランティア活動	交通費補助、活動装備品等	233,076
被災地支援グッズ	被災地支援グッズ仕入れ代等	77,540
支援金関係	C F Jプロジェクト、障害児就労支援施設建設費	48,000
その他の支出	備品等	110,616
		計 586,724

<差額>

収入	661,182
支出	586,724
募金残額	74,458

(単位：円)

# 学生の感想文

## 『被災地の目に見える問題と目に見えない問題』

(臨床心理学科・江口慧 活動歴/2012年度、夏のスタディツアー)

被災地に行き、自分にはいったい何が出るか、どう人と接すればいいか不安がありました。現地には目に見える問題と、目に見えない問題が混在していました。当日は、大森仮設住宅のお祭りの手伝いをやらせて頂きました。そこで気づいたことは、家を失うということは、繋がりが無くなるということです。つまり、目に見える問題として、心の支えがなくなるということです。今まで自分を支えてくれるものがあったから、頑張れたのに持ち物にも、愛着があったものが震災で消えて、安心できるものがない中、今も生活を送っている事実に出会いました。そういう中、お祭りは人との繋がりを作るものであり、公園が少なくなった中、子どもにとって、笑顔になれるものだったと思います。目に見えない問題としては、親戚の方が虐待を行うケースが他人が子どもを預かるケースより、多いといえます。「きっと、どうしてこんなにやっているのに、この子は言うことを聞かないの」と震災後、自分をどう受け入れれば、自分を保てるか、さ迷う子どもの行動

を、自分の子ではないからこそ、言うことを聞かない、反抗していると親戚の方は思い込んでしまうのかもしれませんが。震災後、孤児が暮らせる面倒を見てくれる施設が、5か所作られているそうです。そこで、働く人が必要になることを教えて頂きました。このことから、人と人が支え合うことは大切ですが、一人の人間が一人の人間を支えるということは、負担になっているのかもしれませんが。誰か身近に専門家が子どもの話を聞くだけでなく、親の話、子どもを預かっている親戚の方の話や、相談に乗ってくれる機関が必要だと感じました。私たちの身近な問題でも、子どもを育てられない親は存在するので、その問題にも同じようなことが言えます。私は、将来身近な相談役として、カウンセラーを目指したいと思いました。最後に、ルーテルの学生は恵まれているなど思いました。このような貴重な体験をさせて頂き、ボランティアの機会を作って頂いた皆様に、心から感謝いたします。

(社会福祉学科・二之湯 祐紀 活動歴/2013年度、夏のスタディツアー)

今回、初めてのボランティア活動へ参加しました。私は不安な気持ちでいっぱいだった。自分が行ったところで何ができるのか？ 力仕事は得意じゃないのに、足を引っ張るだけじゃないのかと。でも、実際にボランティアについてそんなことはなかった。自分にあった仕事、それをこなすこと。その仕事は大変で、最初はとまどってばかりだったけどやっ

ていくうちにお客さまの笑顔が自分の自信になっていった。また、被災地を実際に自分の目で見ることも、私にとって大きなことだった。被災前の写真と比較して、被災後の現状をリアルに見て、感じる、ここまで・この高さまで津波が来たのかとおもうと呆気にとられる。悲しいことに、となりびとの活動は2014年3月で一旦の終わりになるらしい。これからは、ルーテル学院が生徒たちが考えて、新たなボランティア活動をしていく必要があるだろうと思う。震災から三年経とうが、十年経とうが、町は故郷は完全に治るわけではないし、形だけなおっても、人の心も良くしなければならなかった。

# 学生の感想文

臨床心理学科・野元 宏昭

参加歴 スタディツアー 2012年夏、2013年春、2013年夏

私は東日本大震災での慰霊碑に向かった時、なにを祈ればいいのか分かりませんでした。「どうか安らかに」、「清らかに」、「来世では…」と、出てくる言葉はどれも嘘の様に感じました。私はあの3.11の津波や地震の恐怖は分かりません。口では少しは分かると言っても、その実、何一つ分かることが出来ません。震災時、私は東京に居たのですから、私が「分かる」とは言えない気がしてた。ボランティア中、私は慰霊碑に向かって何を思えば良かったのかずっと考えていました。けれど、言葉は出ず、何も持って無い自分が浮き彫りになりました。4日目の活動でお祭りのお手伝いをした時、私は子供たちと遊ぶシャボン玉店を担当しました。お祭り中、子供たちもすぐ楽しんでくれているみたいで、へとへとになりながらも気力を振り絞って接しました。無事にシャボン玉店も終わり、屋外の水道で用具を洗っていると、仮設住

宅に戻る親子が近くを通りました。母親とまだ小さな兄弟でした。兄弟は洗い物をしている私に気づいて、「シャボン玉楽しかった!」と大声で言ってくれました。家に入るまで、その兄弟は口々にその言葉を書いてくれ、私に手を振ってくれました。その時私は、心の中でストーンと何かが落ちました。言葉では上手く書けません。慰霊碑に何を祈ればいいのか分からない私でも、とりあえずは今していることは間違っていないだ、と思えました。その時はたまたま、私一人だったので危うく泣きそうになりました。3.11に、私は何か力になれることはないかと思いました。私の周りの友達も同じ気持ちでした。しかし、まだ私たちは高校生でした。しかし、今は違います。やれることがあります。あの時感じた気持ちをなかつたことにしないで、ボランティアに参加してもらえたら、こんなに嬉しいことはないです。

社会福祉学科・佐藤 瑛

参加歴 スタディツアー 2012年夏、2013年春、2013年夏

今回で、3回目となった仙台での活動。前は、スタディツアーの参加で、前々回は今回と同様に大森仮設での夏祭りのお手伝いをやらせていただきました。今年の夏祭りでは、去年プロからの借り物を使ってシャボン玉遊びを行っていたものを、道具を一から自分たちで作って、シャボン玉遊びを行うといった提案を受けました。知らされるのが少し急だったのもあり、メンバーが集まれない中、メールでのやり取りで計画を立て行きました。現地に行ってから、本格的に作業をすることになり、成功するかどうか不安がありながらの出発となりました。事前に用意してあった材料でやってみましたが、失敗が続き、朝からやっていたにも関わらず昼を過ぎてしまいました。そこで、方法を一から調べ直し、買い出しもし直した結果、大きなシャボン玉ができる液を作ることに成功しました。あの時は、本当にハイタッチする気分で、

これで、去年同様、子どもたちが喜んでもらえるものができそうだと、とても嬉しく思いました。次の日には、前日準備のために大森仮設へ向かいましたが、そこでは去年出逢った方と再会することができました。同じ場所で似た内容のことをするときの懐かしさを感じるのには、継続して行けることの醍醐味なのかなと感じました。お祭りでは、現地の方による獅子舞や盆踊りなどに参加し、私たちは、あくまでお手伝いであって、現地の方々やその土地ならではのものに勝るものはないということを再確認しました。なにより、その土地のまとまりを感じるからです。これは、復興とはなんなのか、復興に近づいているのかといった疑問を解決するヒントになったように思います。最後に、毎回お世話になっている、となりびとのスタッフさんや、現地の方々、今回一緒に時間を共有し行動した方々、本当にありがとうございました。

## 「微力だが、無力ではない。」

2011年3月11日に起こった痛ましき東日本大震災から3年間にわたり、ルーテル学院(ルーテル学院大学大学院・日本ルーテル神学校・附属研究所)は、復興支援に向けての支援活動を続けてきました。その働きは決して大きなものではありませんでしたが、私たちの教育や研究の専門性が活かされたものでした。ボランティアに出かけた一人の学生が言いました。「私たちは微力だが、無力ではない。」私たちはルーテル学院で教え、学ぶ者として、自分たちにできることを与えられた使命として活動を続けたのです。ルーテル学院の建学の精神は「キリストの心を心とする」であり、助けを必要とする方たちのもとに出かけて「仕える者となる」ことを使命としています。それはキリストご自身がご自分の命を捧げるほどの愛を与え、自ら仕える者としての歩みを全うされたからです。またキリストは、出会う人たちの「心」を自分の「心」とされました。悲しみや痛みを共に担い、喜びを共に分かち合ったのです。

「私たちは微力だが、無力ではない。」キリストに遣わされた私たちの働きが神様の祝福にあることを願います。また思いを同じくし、私たちの活動を支えてくださった多くの団体や個人の皆様に深く感謝します。ルーテル学院復興支援チームとしての活動はこれで区切りをつけられますが、これからもなお「キリストの心を心とする」学校として、被災された方々の支援に取り組んでまいります。